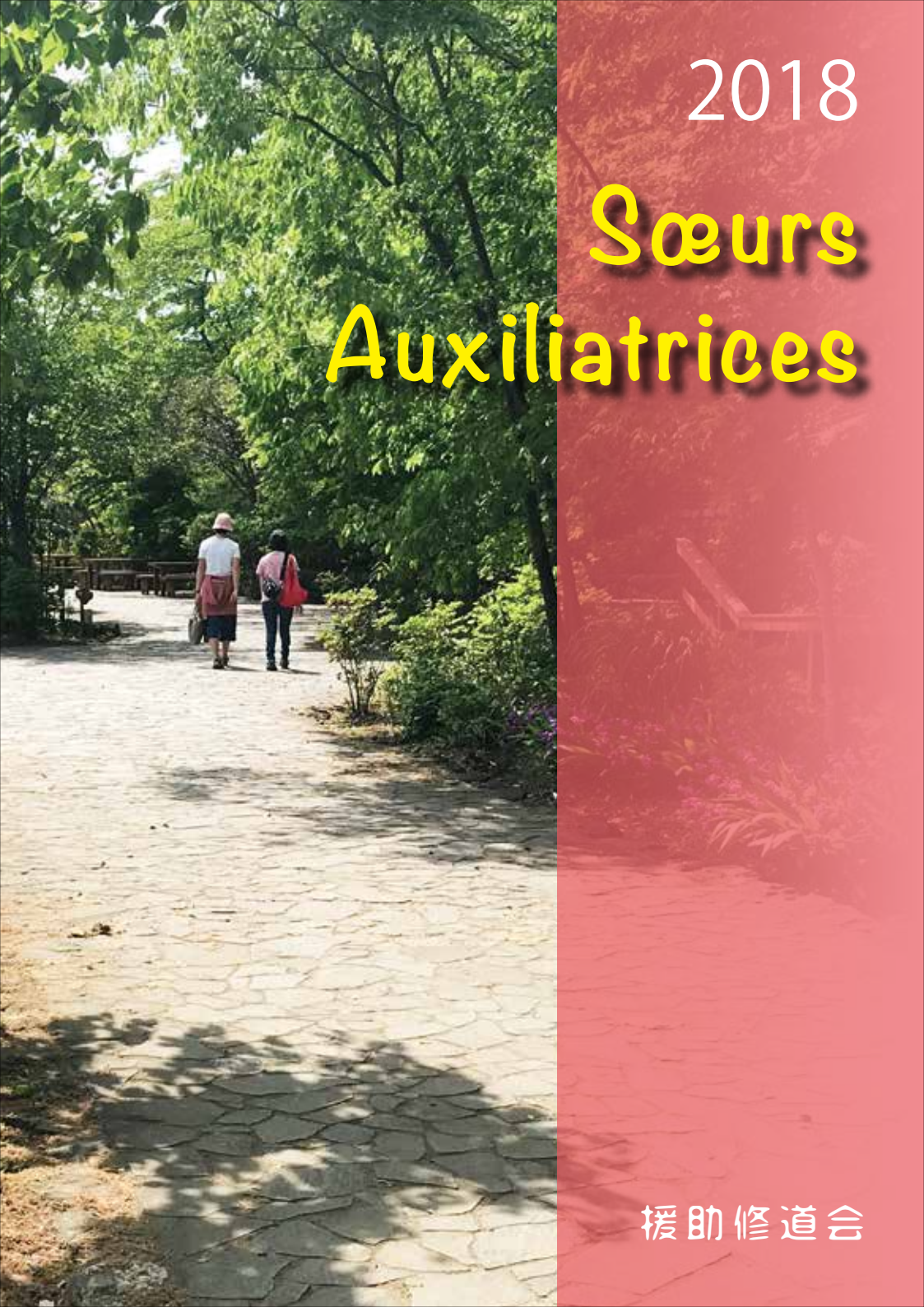




2018

Sœurs Auxiliatrices

援助修道会

主の御名を賛美せよ。

主は命じられ、すべてのものは創造された。(詩 148.5)

この世界を創造された神の思いを、私たちは計り知ることが出来ません。しかし、この思いは、私たちの心に響く神秘であり、かつ、様々な出来事や人々との関わり、自然の営みなどを通して日々私たちを支える礎です。

神ご自身、ご自分がお創りになった被造界を「すべて良し」(創世記 1:31)と認められました。ですから、神に創造されたすべてのものは、とても尊いのです。ところが、時に人間はその尊さを忘れ、神に創造された自分自身をも貶めてしまいます。

キリストが語られた放蕩息子のたとえ(ルカ 15:11-32)には、父の

家に背を向けて離れ去る息子が登場します。それは、神が与えてくださった尊さを忘れ自分の価値を否定する人間の姿と重なります。しかし、最後のところで息子は我に返り、父の家に帰りました。自身が持つ尊さに向けて父の家に戻る息子と、息子が戻ってくることを疑わずに待ち続ける父。この二人の再会の場面には、慈しみと信頼が満ちています。

援助修道会会員の使命は、この息子を待ち続ける父の思いに連なるものです。全ての人が神にとって尊く、大切な存在であることを人々に告げ知らせたい。これが、私たちが抱い

CONTENTS

1

巻頭言

5

単純・快活・
委託の雰囲気の中で

7

神さまの夢と
わたしたち
様々な場所に
派遣されて

3

全世界の
オクシリアトリス
Auxiliatrices

8

国際養成
木村 恭子

9

「日曜日が待ち遠しい！」
橋本 晶子

10

一真実の愛を求めて一
野本 佳子

11

「幸せになって」と願う心
小林 直子

12

♪今日も生きよう！主がおられる♪
山本 紀久代

14

燃える静かな火の玉《being》
古道 重子

15

惜しみなく差し出す生き方
イエズス会司祭 柳田 敏洋

ている望みであり、この望みが、生者と死者を問わずすべての人々と私たちを連帯させるのです。そのことを、創立者み摂理のマリア（エウジェニ・スメット）は、「聖徒の交わり、それは私の命です」と言い表しました。



今日、IT 技術や AI が急速に発展する世界に組み込まれながらも、私たちは「単純、快活、委託」の精神で、日々、自らを奉献しています。一人ひとりの会員が、共通善に開かれ、いただいた賜物を使徒的献身によって惜しみなく人々に分かち喜びの存在となることです。

「すべての人が神によって創造された目的に達するように」（み摂理のマリア）

これこそ、援助修道会に託されている神の創造の思いであり、私たちが献身する望みなのです。

久守 妙子

17

援助修道会
家族

23

立願者への手紙

24

娘への手紙
三浦良造

25

Au-delà ! その向こうで！
マリアンヌ・ブルゴワ

19

橋を架けよう！

27

援助修道会の起源と歴史
～神さまの忠実さの赤い糸～

29

日本管区

全世界のオクシリアトリス Auxiliatrices

全世界へ



- フランス
- ベルギー
- ドイツ
- オーストリア
- ハンガリー
- ルーマニア
- スイス
- イタリア
- スペイン
- イギリス



America

- コロンビア
- メキシコ
- ケベック
- アメリカ合衆国



Europe

Africa

- チャド
- ルワンダ
- ケニア





Asia



- 日本
- 香港
- 台湾
- インド





今が一番
幸せです！

我很幸福！



今が一番
幸せです！



I'm so
happy.



I'm so happy.



저는 정말 행복합니다.



Je suis très heureuse.



神さまの夢とわたしたち
— 様々な場所に派遣されて





国際養成—世界中の仲間たちと手をつないで—

木村 恭子

グローバル化したこの現代世界の中で、私たちの修道会は、国際養成を大切にしていこうとしています。2017 年秋には、世界中の修練者たちがフランスのパリにある総本部に集まって、一ヶ月間国際修練をしました。参加者の国籍は、ルワンダ、インド、オーストリア、ドイツ、ルーマニア、メキシコ、日本でしました。国籍や年齢などの違いがありながらも、神さまから同じ修道会に呼ばれているという連帯感に結ばれて、修練者たちの間にはユニバーサルな友情、信頼が芽生えていきました。

現在、日本管区の修練は、日本をベースにして行っています。そこでイギリス管区の会員の滞在による共同生活や修練者がインドの修練院で実習する等のプログラムもあります。初誓願宣立後も、有期誓願者の国際セッション、第三修練、その他の機会に、国境を越えて、さらに多くの会員たちと出会って、互いに奉獻生活を生きている現実を分かち合い、問いかけ、支え合っています。

コミュニケーションにおける非言語と言語の割合は研究によって諸説ありますが、非言語 93%、言語 7% (A・マレービアン) と言われます。私自身、これまでの修道生活の中

で、いくつかの国に滞在して、自分とは異なる国籍の人と出会ったり、一緒に暮らしてきました。語学が堪能でない場合、かえって非言語の部分が研ぎ澄まされて大いに役に立つ場合も多々あります。何よりも、「自分の貧しさを感じる中でこそ、より親密に神に出会うことができる。」その恵みをいただく機会になるのです。そして、人の親切も深く味わいます。国籍を越えて、世界のあちらこちらに心を通わせ合える友がいるのは、幸せなことだと思います。また、日本の常識が世界の常識ではないことを知ることによって、心が広げられます。

経済的なことだけでなく、精神性も含めて、世界の人々が互いの豊かさを分かち合うことによってこそ、より幸せな世界が実現していくのではないのでしょうか？

世界には多種多様な文化や状況がありますが、私たちはその現実直面しながら、神さまからの「人々の間に普遍的な交わりが可能であると信じてその交わりをつくるように」という呼びかけに、聖霊に助けられながら、世界中の人々と共に、力を合わせて応えていきたいと願っています。

「日曜日が待ち遠しい！」

橋本 晶子



「**疲**れたー…。」「眠いー…。」そう言いながら、子どもたちが教会へやってくる日曜日の朝が、私は大好きです。そしてぶつぶつ言いながらも、元気よく侍者奉仕をし、聖歌を歌い、教会学校で真剣に分かち合う姿を見る時、神さまの最高の笑顔に出会えるように思うのです。

私は現在、養成期を過ごしていますが、教会学校での奉仕を望みとして持ち、派遣の恵みをいただいていることに感謝しています。受け入れてくださった小教区では、子どもたちだけではなく、司祭、リーダーとの信頼関係のもと多くの学びと協働の喜びを体験しました。それぞれの教会の特色に触れながら、教会共同体に祈られ、励まされ私自身の召命も支えられていると感じています。

そしてこの日本社会の中で、キリスト者であるということを幼い頃から体験している子どもたちは、小さいながらもたくましい福音宣教師なのです。日常の学校生活と教会の教

えの狭間で、悩みながらもまっすぐに向き合おうとしている姿に、心が震えるような時もあります。また、中高生になり、教会から足が遠のく時期に抱える、家族の心配や不安に出会うこともあります。

そのような時、「大丈夫。いつでも帰ってこられる家がここにある。」そう言うくださる神さまの思いの一つでありたいと思うのです。そして信者であってもなくても、孤独や不安を感じている青少年たちが、安心して温かさを感じられるような家そして共同体がこの世界には必要であると、私は呼びかけられていると感じています。

私も疲れます。それでも日曜日が来るとなんだか元気が湧いてくるのです。それは毎週、小さな福音宣教師たちが神さまの愛を伝えてくれるからなのです。これからも、彼らと共に主の食卓を囲みながら、喜びと希望に向かって歩んで行きたいと願っています。

—真実の愛を求めて—

野本 佳子



20代の頃、私も他の人同様、自分の将来の道を探し、悩み、考えていました。悩んでいる私に友人は助けの手を差し出してくれていましたが、その親切を感謝しつつ、私は誰も私の悩みや心の渇きを理解し、解決してくれることはできないことに気づいていました。そんな時に私は祈られている自分を強く感じ、霧が晴れるように私の心がすっきりしたことを今も思い出します。自分の道を見つけ、その道を歩むのは本人以外誰もできません。私はすでにカトリックの洗礼を受けていましたので、相談できる司祭に私の心の思いを打ち明けました。その司祭は生涯を神に捧げて生きる道を除外している私に気づき、その道も自分の人生の選択肢に入れるようにと助言されました。それがきっかけで私は私の心に働かれる神の招きと私の心の深みにあった神の愛（本当の愛）への憧れに気づきました。この憧れとイエスの招きが出会い、私は煉獄援助修道会へと導かれました。今思えば聖霊が人々を通して働かれ、私を永遠の住み家である修道会で奉献生活者とし

て生きる人生を恵みのうちに与えて下さったのです。

初誓願後、私は教会と学校で「みことばの宣教」に従事し、こどもから青年、中年に至るまで幅広く人々と関わることになりました。人の救いは“キリストに出会い、キリストと共に生きること”であるのを体験的に知っていた私は、人の中に住みたいと望んでおられるイエス・キリストを、苦しみ悩む人々に伝える使命を感じ、霊性面での働きへと方向づけられました。現在はそのニーズに応えてくれるイエズス会霊性センター「せせらぎ」でイエズス会司祭や信徒の方々と共に、日本の教会の活性化につながる心理的霊的支援のプログラムの企画・実践をしています。

フランシスコ教皇は使徒的勧告『福音の喜び』の中で私たちに多くの人々の神への渇きにふさわしく応えるように、交わりと宣教の実りへと彼らを招き、人をいやし、解放し、いのちと平和で満たす霊性を教会の中に見出すことの大切さを述べておられます。私はこの教皇様の勧めに共感し、これを私の使徒職の指針にして

います。確かに、現在、祈りに渴き、祈りを深めることを求めている人たちは多くなっています。その人たちが「せせらぎ」が提供するプログラムに参加し、内的に変化した顔の輝きを目の当たりにすることが多くあります。祈りは力を与え、人を神の似姿に変えていきます。現実の中で神が働いておられるのを実感し、私の心も大きな喜びに包まれます。「祈

りの同伴」を通して私も神を体験する恩恵に与っています。苦しみと暗闇の中にある人々が神の愛への渇きに気づき、神を求め、神に出会うことを願い、希望を持って生きる人生へと勇気をもって向かっていく姿は美しく、そこに同伴できるのは本当に“しあわせなこと！”です。

「幸せになって」と願う心

小林 直子



私は現在、特別区（東京 23 区）路上生活者自立支援センターにおいて相談員として働いています。自立支援センターの説明には「仕事と住居を失った方を対象に求職活動、住宅確保についての相談、自立支援住宅での生活訓練などの支援を行う」とあり、実際にハローワークや福祉事務所、医療機関等と連携を行いながら、自立支援を目的としています。

自立支援センターは入所枠が 70 人で 1 日約 1 人～2 人の入所があり、その方がたを迎えます。その際に入所に至った経緯を聞き、入所期間の 6 か月間にその方の生活に触れていくこととなります。これまでに行わ

れたアセスメント（課題分析）を見ていくと、彼らの育ってきた背景に様々な深刻な問題があることに、初めは驚きを隠せませんでした。幼児期、少年期の親からの虐待、家族の崩壊、貧困、精神障害、知的障害、身体障害、発達障害、性的マイノリティ…まるで社会問題のるつぼをのぞき込んだように思いました。「その人たちの背景にどのような悲しみが隠されているか」ということに触れ、心が苦しくなり、なにも出来ない自分の無力さを痛感しましたが、同時にキリストはこの人たちに会いたいと思っておられるのだとの確信も私の中に生まれました。私の無力さ

を痛感しましたが、同時にキリストはこの人たちに会いたいと思っておられるのだとの確信も私の中に生まれました。私の無力さを通してでも、キリストがこの方たちに会いたいと思っておられるのなら、私は喜んでそこにいようと思いました。

マタイ20章「ブドウ園で働く労働者と主人」のたとえで、主人は「最後に来たものから始めて、最初に来た者まで順番に賃金を払ってやりなさい」といい、不平を言った者に対して「友よ、あなたに不平なことはしていない。」と論じます。続く「わたしはこの最後のものにも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。」と言われ

る主人の心が、路上生活者の人々にも注がれているのを感じます。

社会的な救済措置も必要ではありますが、本当に彼らに伝えたいのは父のいつくしみの心です。公的な機関においてどのように伝えられるのかを模索中ですが、共に働く職員の姿に励まされています。仏教徒の職員、共産党員の職員、宗派は違いますが、「その人たちの背景にどのような悲しみが隠されているか」に触れることにより、「どうにか彼らが幸せになってほしい」と願う心は一緒であると感じます。一人の人の苦しみに、職員が心を合わせて協力する姿に、確かにここにキリストがおられるということを実感する毎日です。

♪今日も生きよう！主がおられる♪ 一下関に派遣されて

山本 紀久代



2015年4月援助修道会の小さな種が下関に蒔かれてから、この3月でちょうど3年が経ちました。修道服を身に着けているわけでもなく、大きな修道院を構えているわけでもない小さな共同体は、人々の中でこの小ささに感謝しながら存在し、平和の使徒となることを願う広島教区の端っこで、教会と人々

の必要に応えるべくささやかながら胸を張って今日を生きています。

人は住まいを移し視座を変えることで、それまで見えなかったものを見るようになります。日本はかつて韓国を植民地とし、彼らの文化、名前も言語も奪いました。日本には今も各地に朝鮮学校（ウリハッキョ）があって、いろいろな理由で戦後祖

国に戻らなかった(戻れなかった)人々の子孫が在日2世、3世、4世、5世として学んでいます。下関にも幼稚園から中学校までのウリハッキョがあり、33名の生徒さんたちが通っています。歴史のはざまで母国語を母語とすることのできなかった人々の苦しみに、遅まきながら下関に来て初めて触れました。

わたしは下関での仕事の必要から韓国語を習い始めました。でも10代20代で学んだ語学と比べると情けないほどに覚えられない…。それなのに！勤め先から語学研修のために三ヶ月間韓国に行くようにといわれました。う～ん、どうしよう…。行くかどうか躊躇していたわたしの背中を最終的に押してくれたのは「互いに学び合うことは、互いの傷を癒すことです」という一人の在日のお母さんのことばでした。

もう少し楽に100個覚えられたはずの単語が、今は10個しか覚えられないとしても構わない。わたしがひとつハングルを覚えることが、その昔彼らから取り上げてしまった言葉をひとつお返しすることになるとしたら、それがどこかで互いの傷の癒しにつながっているとしたら、学び

続けること自体に大きな意味がある。そう気づいた時、韓国語の勉強はわたしにとってまったく違った意味合いを持つようになりました。

自分自身の葛藤と慰め、苦しみと喜びを通してさえも、人類の歴史の中で無視され、傷つけられ、重荷を負わされてきた、生者と死者を問わないすべての人々とつながり、彼らとともに清めの道を歩むことができるというわたしたちの創立者の直感は何んと広くて深いことでしょう。

現実の日々におけるささやかな働きと祈りが神様の御手の中で膨らんで、すべての人が創られた目的に達するための献げものとなることを願いながら、♪今日も生きよう！主がおられる♪と歌っています。



燃える静かな火の玉 《being》

古道 重子

2014年わたしたち14名の高齢会員は修道院から離れて「ケアビレッジおおず」と「仁豊野ヴィラ」に飛び立ちました。頂いた召命を最後まで“生き生きと”生きる為に外部の方に手を貸して頂く事を選びました。

それは時宜にかなってとても良かったです！！

援助修道会のカリスマを生きるのにピッタリ！！

1歩部屋を出ればそこは現代社会の真ただ中。人々と生活を分かち合う場。すべてが祈りに変えられる場。悲しみや苦しみ、痛みを分かち合う場。同じものを一緒に食べる過ぎ越しの場。すぐそばに苦しんでいる友がいる場。良い事もあるが忍耐を求められる場。

生活面、医療面で手を貸して頂き、自立できるところは自分で行います。共同体生活面ではお互いに助け合い、支え合い、協力し合って、程よい距離感を保ちながら関係性を築いています。祈りは特に大切な時間となっています。

わたしたちが修道院から飛び立ったその深い意向は、若手会員の使徒

的エネルギーを解放することでした。「あなたたちは、望まれた奉仕の道を精一杯生きなさい！！」と。しかし、気付いてみれば、若い会員だけではなく、わたしたち高齢会員の使徒的エネルギーも自ずと解放されていました。50年、60年生きてきた援助修道会会員としての賜物はその方の中で今も静かな火の玉となって燃えています。その火を誰も消すことは出来ません。

1人1人が会員として頂いたカリスマを今現在、体力に見合った方法と在り方でゆると羽ばたいています。しかし、高齢ですから羽ばたく為には周りの方々の温かな思いやりと助けを受けていることも確かです。何かが出来る事は大切ですが、それ以上に存在そのものが求められているのでしょう。「ケアビレッジおおず」「仁豊野ヴィラ」の会員は《存在する事》《being》を人々の中で学びつつ今を生きています。

ケアビレッジおおず

一般のサービス付き高齢者住宅：
会員10名で共住生活

仁豊野ヴィラ

大阪教区立高齢司祭修道者の家：
会員4名で共住生活

惜しみなく差し出す生き方

イエズス会司祭 柳田 敏洋



イエズス会の中でおもに霊性使徒職と大学使徒職に携わり、その中で援助修道会のシスター方との出会いが多くありました。30日のイグナチオの霊操や8日間の霊操の同伴もよく行いました。

援助修道会のシスター方は個性豊かで、自立心が強く、自らで切り拓いていくたくましさをもっているように思えます。それは修道会の霊性の一端を担うイグナチオの霊操によるところもあるでしょう。そのたくましさはやさしさも兼ねそなえたものです。

私が特に身近でかかわるようになったのがエリザベト音楽大学で働いていたときでした。キャンパス・ミニストリーのスタッフとして援助修道会のシスター方がよく手伝ってくださいました。その中で忘れられないのがシスター二條あかねさんです。若さを生かして学生のために親身になって相談に乗り、安らぎと交わりの場を与え、聖書を教え、黙想会で祈りを体験させ、寮で学生の世話をするなどフルに働いていましたが、新しいミッションとしてチャドに旅立ちました。その後一時帰国し

たとき笑顔で「いろいろと大変なことも多いけれど、私はチャドにいて幸せです。だから、早く戻りたいと思っています」と話してくれました。その彼女が翌年チャドで交通事故で亡くなったと知らされたとき、とてもショックを受けました。36歳の若さでした。

彼女がおみやげにくれたチャドの木製のお椀を見つめるたびに彼女を思い出します。彼女はその直前の手紙で「幼子イエスに贈った私からのプレゼントは私自身です。もろくて貧しいけれど、イエスが愛しているチャドという大地で、喜びとともに生きているこの私自身を捧げました」と書いていました。必要とされる人々のところに赴き、その人たちを愛し、惜しみなく自分を差し出すという援助修道会の心をシスター二條はその短い生涯の中で示してくれたと思います。

今、私はイエズス会の霊性センターで働いています。そして援助修道会のシスター方によく助けられています。霊的な渇きを覚える多くの人々が黙想や瞑想にセンターを訪れます。霊的な渇きは、心のもっとも奥深く

で自分が何者であるかを見いだし、そこにおいてアガペの神と響きあう中でいやされるものでしょう。これは内的な援助また外的な援助によって苦しむ人々に手を差しのべる援助

修道会のカリスマに通じると感じます。シスターたちがイエスのアガペの心に響き、アガペを生きる人として人々の助け手となってくださるよう願っています。



援助修道会家族



援助在俗会の使命は何ですか？

在俗会員として三つの誓願（貞潔・清貧・従順）を立て、職業を通して、置かれた場で、信徒の身分で奉獻することです。

援助在俗会の会員として、どんな喜びがありますか？

- ・キリストによって集められ、キリストの愛に満たされて生きる喜び。
- ・離れて生活していても、会員の絆に支えられ、生涯にわたって養成される喜び。
- ・社会のただ中で、目立たず、しかし情熱的に信仰を生きる喜び。
- ・人びとの中にキリストの福音の種をまき、一緒に育つ喜び。
- ・苦しむ人に寄り添い、共に助け合って生きる喜び。
- ・煉獄の魂と共にあることは、生きる力！

社会の中で

SA 友の会が大切にしていることは何ですか？

それぞれ生かされている日常で、必要とされていることを静かに行うことです。

具体的にどのような活動がありますか？

- ・北九州の黒崎、広島、東京では、定期的に会員が集まり、創立者み摂理のマリアについての読書会や、黙想会を行ったりしています。
- ・援助修道会の総本部フランスでは、国際的な友の会の集まりがあり、出会いと喜びを分かち合うことができました。
- ・昨年度は、フランスから援助修道会の総長さまと総顧問の方々が日本を訪問され、それぞれの地区の友の会で出会いの時を持ち、希望への歩みを分かち合いました。

家庭の中で

苦しむ人々とともに
祈り、働きます。



橋を架けよう！

日本での一ヶ月

2017年1月、私は日本管区に招待されて、日本に一ヶ月滞在する機会を得ました。こんなに遠くへ、それもこれほど長期で旅行するのは私にとって初めてのことでした。パリの本部の家で何年も受け入れの奉仕をしながら世界の会員と出会ってきたけれども、それはフランスの背景においてですから、今回は私自身が移動して外国人となり、聞き取れない、話せない、読めないことを経験したのでした！

東京から、名古屋、京都、神戸、大阪、姫路、広島を経て長崎まで巡り、宮島や平戸にも行きました。庭園や料理を通して日本の美や繊細さに触れ、お箸を使って食べることを楽しみ、新年を祝うお節ご飯も味わいました。ふと気付くと一度も“ガレット・デ・ロワ”（ご公現のお祝いのフ

ランスの伝統的なお菓子）を食べないで1月を過ごしていたのです。博物館に行ったり、畳で寝たりして日本の伝統も少し学びました。家の中に入る時には靴を脱ぎ、お寺や教会に入る時にもしばしばそうしました。私の足は大きいので、サイズの合うスリッパを見つけるのが難しかったのですよ！宣教が最初に行われた地を訪れては、キリスト者のルーツや迫害の歴史を知り、原爆で打ちのめされた広島や長崎では、とりわけ人々の平和への願いを感じました。

そして私は何よりも兄弟姉妹愛の経験をしました。援助修道会の日本人会員のほぼ全員に会って、私は受け入れられるまま、動かされるままになりました。彼女たちは私に扉を開き、寛大に自分たちを差し出し、異国の地での私の一步一步を同伴し

ミリアム・ビゴ



てくしました。フランス語か英語で、時には通訳も介して私たちはコミュニケーションしました。私たちは、創立者ウージェニー・スメットに印づけられ、教会において、キリストに従う援助修道会という一つの体を共に構成する姉妹です。私たちには共通の根があり、それが文化や慣習の向こうで私たちを一つに集めています。ミサの進行で迷子になることはありませんでしたし、共同体ではテーブルに置かれた会の文書の数々、

馴染みのある壁に掛けられた創立者や現総長チームの写真、広く知られた芸術作品が目に残りました。

帰国の前晩、一ヶ月の滞在を通して気づいたことなどを姉妹たちに分かち合う中で、私は、日本には遠慮深さやある種の距離感がある、例えば挨拶する時に抱擁をしないなど、というようなことを言ったのですが、翌日の出発の際には、皆の温かい抱擁に欠くことはありませんでした！同じものがあり、異なるものがあります。フランスと日本はかなり異なるので、私たちは互いに豊かにし合うことが出来ます。私は自分自身への招きとしていくつかのキーワードを携えて帰国しました。「自由に自身を差し出すこと、おもてなし、寛大さ、繊細さ、調和、兄弟姉妹愛、喜び…」心から感謝しつつ！！

橋を架けよう！

アジアンミーティング

古屋敷 一葉

2011年5月の台湾での集まりを皮切りに、中国・インドグループと日本管区の比較的若いシスターを中心に出会いの集まりを続けています。その後、インドで3回、日本で1回の集まりが行われ、2018年現在、開催回数は5回を数えています。従来は講師の講

話を受けてからの分かち合いを中心にやって来ましたが、少しずつその形も変化しています。

2017年に日本で開催した際には、京都観光や、広島での平和学習といったフィールドワークや、高齢会員の話を聴き、共に祈る機会を設けて世代を

日本巡礼とイグナチオの霊性家族の絆

三浦 ふみ

「平和を生み出す人としての役割がある」と自覚させられた」「数々の出会いと歓迎が忘れられない」「何より感動したのは、世界のキリスト者の大きな家族に自分が属しているということ」…若き巡礼者たちの貴重な体験の実りは、今、彼らの生活の中で生き続けています。

フランスの青年たちは、2017年夏に約2週間かけて、大村市、長崎市、五島、広島、東京を巡りました。この

巡礼は、援助修道会の日本管区とフランス・ベルギー管区の姉妹が、青年司牧で協働している Le réseau MAGIS/ Jésuite et Famille Ignatienne (マジスネットワーク／イエズス会とイグナチオの霊性家族)と一緒に企画しました。

世俗化の進むフランス社会に生きる若者は、日本に沢山の関心をもっていました。日本のキリスト者が全く異なる伝統的宗教を持つ文化の中で、極めて少数派として、どのような迫害の歴史をくぐり抜けてきたのか、今日はどのように生きているのか。巡礼グループ



超えた出会いの時もありました。2018年は、それぞれのグループや管区の歴史と現状を紹介し話し合うことで、同じ精神を生きる会員として、互いを一層深く知ることができました。

今後も、出会いを続けながら、お互いにどのような協働が可能なのかを見ていくことができればと思います。



は各地を歩き、質素なあり方で旅を続け、キリスト者迫害や原爆の歴史に直面し、日本文化に触れ、人びとと出会い、あたたかい歓迎を受けました。日々の意識の究明や分かち合いを大切に、暑さや疲れにも関わらずグループとして結束して、互いに親切に注意深くありました。

他者に受け入れられた経験は、他者を受け入れることの出来る人を育てます。人は他者が必要であり、キリスト

の充満に至るためにお互いが必要なのです。霊性家族は、信仰における命が生まれ育つ場を差し出すことが出来るでしょう。イエスにおける深い友情で結ばれて、共に夢を抱き、実現のために協力して奉仕するとき、そこには大きな喜びがあります。



立願者への手紙



娘への手紙

三浦 良造

娘ふみが、終生誓願を立てるにあたり、私は大変に嬉しい気持ちでいます。養成期に機会があって仏リヨンで会ったとき、元気な様子に安心したり、お父さんは人生の統合の時期ですね、などとコメントをもらってなるほどそうだと思ったりしたものです。4年前に洗礼を受けたばかりの私は、折に付け彼女から“うながし”を受けているように思えます。そして、5年前に帰天した妻に、今日はこうだったよ、と報告したりしているのです。

昨年8月にフランスから青年グループが日本巡礼に来るという知らせを受けて、五島にゆかりが深い長年の友人夫妻が是非お手伝いしようと計画し、私は巡礼団が上五島で歩き疲れた場合に備えて伴走する車の運転手の役割を頂きました。岬ごとにある教会を訪れ、そこからの素晴らしい眺めを味わい、また地元の方々から暖かい心がもった歓迎を受け、心が洗われる日々を過ごしました。「ここは暮らしの中に信仰があるというよりも、信

仰の中に暮らしがありますね」というある方の言葉をその通りだと思った次第です。また、巡礼団の引率者として娘がフランス語を話すのを聴いて、リヨンで会ったときよりもずいぶんよどみなく話していることに、これなら大丈夫だろうと安心と同時に感心しました。40年以上前に私が米国留学から帰国した際に、私の両親も同様なことを想ったかもしれない、などと昔のことを思い起こしたりしました。

イエスさまはいつも一緒に居てくださる、という福音を心に留めて暮らすことを私自身も心がけようとしています。娘は子供のころから元気でしっかり活動する人でしたが、終生誓願を立てて、これからもまっすぐに成長してくれるようにと願っています。



Au-delà ! その向こうで !

私が援助修道会に入会したとき、様々な境界の向こうで、これほど豊かな姉妹的生活を経験することになるとは思っていませんでした。

« Au-delà » 「その向こうで、その先で」。私の姉妹であり友であるふみは、この言葉を特別に好んでいます。私たちはキリストにおける姉妹です。外見の向こうで、言葉の向こうで、文化の違いの向こうで、私たちを隔てる何千キロメートルの向こうで、…の向こうで。

私はマルセイユであかねを受け入れ、パリ郊外で敬子と1年間共同体で生活したことがあり、彼女たちによって繊細で真実な日本的な兄弟愛の中に招き入れられ、日本人に対する印象が幾らか変えられていました。そして、修練期のふみをルルドの共同体に迎え入れました。ふみ、あなたはあなたらしい在り方で、大きな姉妹愛を味わわせてくれましたね。

ふみは、開かれた心と情熱をもってルルドの聖域の子供の家での実習に取り組みましたし、既に良き援助修道会会員として、善いことなら何でもする態度でした。ルルドの共同体に存在し、姉妹たちと一心同体にな

るために、彼女を受け入れたこのかなり異なる国や文化を理解するために、語彙や表現、使い方を学びながら、他者に耳を傾けました。ふみは自分に語りかけられる全てを、聖イグナチオの良き娘として好意的解釈で味わいます。

サンチャゴ巡礼のフランスルートで、それから、MAGIS ネットワーク（イグナチオの霊性の青年司牧ネットワーク）のスペイン巡礼 “Manresa” で、ふみは少しずつ、より一層キリストの自由を自分のうちに受け取っていきました。彼女は、自分の国や故郷、習慣から遠く離れたところで経験しなくてはならなかった数々の死から命への過ぎ越しの証人で、主の愛は全てに勝る、という研ぎ澄まされた堅固な確信を私たちに与えました。

MAGIS ネットワークで、フランス人青年たちのために日本巡礼を一緒に企画して、日本に行ったとき、私はあらためて、ふみが具体的に、文化的に、霊的に私たちと関わるために駆け巡った道程に思い至りました。ふみ、あなたは、私たちがあなたの美しい国に行って人々に出会えるよ

うに、細やかに丁寧、かなりのエネルギーを注ぎましたね。あなたたちの友人は私たちの友人…私たちは恩恵を受けた幸いな人でした。

私たちの姉妹的な友情を思うとき、私の心にはご訪問のマリアの福音が浮かびます。これが、私たちの最も深みに宿っていて、言葉や歴史や年数の向こうで私たちを結びつけるのでしょう。この内なる震えが日本巡礼を企画するという途方もない賭けを可能にしたのでしょうか。日本の地に降り立って、その滞在中、私は決して欠けることのない御摂理の母性的な善良さを感じていました。ふみはその何かでした。そう、私たちの創作者み摂理のマリアの良き娘とし

て「み摂理の摂理」でした。姉妹たち、友人たち、そしてお父さまに助けられながらね。そこには姉妹的愛の爽やかさと単純素朴さがあり、それはパウロが語る霊の結ぶ実（ガラテヤ5）です。言葉は要らなくて、境界の向こうを行く笑顔を必要とします。このほほえみは、私たちを人間味溢れる神さまの子供とします。

私の姉妹であるふみ、主があなたに与えてくださった全てのことゆえに、あなたがそれを広く分かち合おうとして実を結ぶことのゆえに、ありがとう！この契約の道において永遠に「はい」と応え、永遠にキリストにおける私たちの姉妹でいてくれることに、ありがとう！



援助修道会の起源と歴史 ～神さまの忠実さの赤い糸～

創立者ウージェニー・スメット誕生

私たちの会の創立者、ウージェニー・スメットは1825年北フランスのリルに生まれました。幼い頃から神に対して大きな信頼を持ち、そして煉獄の靈魂について考えていました。



招きに応じて

1856年1月19日、ウージェニーはパリに出発し、煉獄援助修道会（通称：援助修道会）が創立されました。

ラ・バルイエール街に修道院を開いた翌々日、ある人が修道院を訪れ、この町の貧しく、誰が来ることも拒んでいるという女性の看護を依頼しました。修道会創立後、具体的にどのような働きを行っていくのかを探し求めていたウージェニーにとって、これは神からの答えでした。派遣された会員たちが交代で女性を世話するうちに、女性は次第に神に近づいていくようになりました。



神からの呼びかけ

1853年11月2日「死者の記念日」、ウージェニーは当時住んでいたロースでの聖体拝領の後、深い直観を与えられました。死後清めを受けている人々のために捧げられた修道会を創立する、というインスピレーションでした。

これが神の意志であることを確認するため、彼女は5つのしるしを神に願います。そして、2年のうちにそのしるしは全て実現されました。

1853

1856

1825

日本の地へ

1930年代はじめ、ある若き会員は、フランシスコ・ザビエルによって信仰の種を蒔かれた日本での宣教を夢見ていました。彼女が自分の願いをイエズス会士の叔父に打ち明けると、彼は当時広島に派遣されていた学友であり同じイエズス会士のロス司教に手紙を送って、その可能性を尋ねました。ロス司教は答えました。

「援助修道会会員をぜひ日本へ送ってください」！

第一陣としてフランスとベルギーから4人の会員が派遣され、1935年4月27日、広島の三篠に修道院が創立されました。

広島に続いて、1936年に九州の八幡（のちに黒崎へ移転）に修道院が創立されると、ここでは幼稚園や老人ホームといった事業が行われました。



1935

1945

傷ついた人々と共に

会員たちは戦時中「敵性外国人」と疑われながらも病人訪問や託児所の開設を通して、人々と関わり信頼を得ていきました。修練院に日本人の会員も入会していきました。1945年8月6日、広島原爆投下によって修道院が全壊しましたが、奇跡的に会員は無事でした。長束のイエズス会の修道院に避難した会員たちは、そこでアルペ神父と共に傷ついた人々の治療に当たりました。その後、託児所を再開し、広島市の復興とともに歩みました。

1947年には東京の市谷に創立され、外国人を含めた子どもや女性を対象とした教育施設および教会司牧など、使徒的活動の範囲は広がっていきました。



必要とされるところへ

1970年代から修道会の事業体は他者へと譲られ、現在は会員一人一人が様々な分野（宣教司牧、黙想の同伴、社会福祉、幼児教育から大学の教育の場、社会正義の働き等）に派遣され奉仕をしています。



わたしたちは自分の全生涯と使徒的奉仕活動のすべてを神にささげ、
この奉献を生者と死者を結びつける神秘的な連帯への信仰と、
神がすべての人にすべてとなられるという希望のうちに生きる。

（会憲 12 より）



日本管区



修道生活および援助修道会について詳しく知りたい方は、下記にご連絡ください。

管区本部 162-0843 東京都新宿区市谷田町 2-24 TEL. 03-3269-3285

修練院 162-0843 東京都新宿区市谷田町 2-22 TEL. 03-3269-5639

<http://auxijapon.com>

<https://www.facebook.com/auxijapon>

発行 援助修道会日本管区秘書局



**Sœurs
Auxiliatrices**

援助修道会